

海外研修報告書 ～病院・調剤薬局見学を通して～

宮本 花純

5年 12A155

はじめに

2016年 8月17日～20日、韓国・東国大学薬学大学での海外研修が行われた。

本学からは5年生5人・4年生2人・3年生4人の計11人が参加し、東国大学本学・薬学部・大学病院・韓方市場・韓方博物館を見学した。病院、薬局見学を通して感じたことについて報告する。

病院見学

8月18日に東国大病院を見学させていただいた。調剤室では以下のような日本との共通点があった。

- ・調剤後には監査を行い、薬がきちんと調剤されているか確認している。
- ・ATCによる一包化など調剤が自動化されている。
- ・麻薬が金庫で管理されている。
- ・DI室で患者さんからの薬の質問について勉強している。

・抗がん剤調製ではガウン、帽子、マスクを着用し被曝を防いでいる。

一方で日本とは違うと感じた点もいくつかあった。

- ・PTPシートのままの薬が日本に比べると少なくボトルの薬が多い。患者さんへの調剤はほぼ一包化されている。
- ・水剤の分注も機械による自動化がされている。
- ・麻薬管理の金庫が1つではなくいくつかおいてある。

これらの相違点について働いている薬剤師の方に質問をしたところ、韓国では自動化が進んでいる、麻薬は麻薬の種類によって金庫が別々になっており、管理は1人の薬剤師が行っているとのことだった。

また、Decoction departmentを見学させていただいたがここで韓方薬の調剤を行っており、急須や丸剤を調製する機械など日本の病院ではあまり見かけない器具もたくさんあった。





上の左の写真の機械は外来患者の薬を調製するとき用いる機械で、これを使用することで10日分の薬を調製することができるとのことだった。右の写真の急須は入院患者の薬を調製するとき用いる。

また Decoction department には無菌室もあり、無菌室は温度や湿度が管理されており一定の環境に保たれていることが分かった。生薬の管理については下の左の写真のように棚にそれぞれ入れて行っている。この棚は8月19日に韓方市場に行った時にも生薬を取り扱っている店で見かけたため日本ではあまり見かけないが韓国ではよく使われているものであるとわかった。

日本では西洋薬と漢方薬について1つの学部で学び、臨床でも一緒に処方されることがあるが、韓国では別物とし



て捉えられており、韓方を学び実際に調剤するためには韓薬学科を卒業する必要があることが分かった。また医者についても韓方を取り扱う医者があることが分かった。

調剤薬局見学

東国大病院の門前薬局を見学させていただいた。日本ではドラッグストアなどのチェーン店が存在するが韓国ではチェーン店がほとんどなく個人薬局が多いとのことだった。見学させていただいた薬局では500-600種類のルーティンの薬があり全部で800種類ほど取り扱っていた。薬局でも一包化が行われておりPTPシートの薬もあったがほとんどがボトルであった。また韓国では薬が処方されると「審査評価委員会」に情報が行き、もし違う病院で同じ薬が処方されてもそのシステムによって薬



の重複を避けることができることがわかった。日本ではお薬手帳で対応しているが韓国では画期的なシステムを導入している。

感想

今回この研修に参加させていただき、韓国と日本の医療や、薬剤師の共通点や相違点について学ぶことができました。特に病院見学では1期に病院実習をさせていただいたのでその違いについて自分の経験と比較することができました。また、韓国では韓方薬に非常に重きが置かれており、いろいろ見学させていただきお話を聞かせていただいたことで研修前よりも韓方薬について興味が強くなりました。

研修を通して感じた事は自分自身の英語能力不足であり自分からコミュニケーションをとることができなかつたため、英語能力も身に付けていきたいと思えます。今回貴重な機会を与えてくださった愛知学院大学薬学部国際交流委員会、東国大学薬学大学の皆様に厚く御礼申し上げます。